研究ノート

保育者養成における子育て支援を実践的に学ぶ授業モデルの試行

新山順子（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）
京林由季子（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

要旨：岡山県立大学では，県が推進している「おかやま子育てカレッジ」事業を受けて，2010年より学内に地域子育て支援拠点を開設した。保育者養成カリキュラムでは，この地域子育て支援拠点に集う親子との交流を通して，学生が実践的に学ぶことができるよう授業の工夫を重ねてきた。本研究では，子育て支援についてより深く実践的に学ぶために新設した科目「子育て支援プロジェクト研究A」の概要と2021年度の試行状況について検証し報告を行った。受講生の事後の感想からは，子育て支援の価値や意義に触れているものが多く見られ，実践の前に拠点の設立経緯などを理解したことで，より深い学びに繋がったのではないかと推察された。

キーワード：　保育者養成　子育て支援　授業モデル　おかやま子育てカレッジ

Ⅰ．はじめに

筆者らの所属する岡山県立大学では，2007年度より岡山県が提唱・推進している「おかやま子育てカレッジ」(1) を受けて，学内に地域子育て支援拠点(2) を整備する準備を開始した。2010年には，大学が立地する総社市と岡山県備中県民局とともに「県大そうじゃ子育てカレッジ」事業に取り組むこととなり，学内には地域の親子が集う子育てひろば（「チュッピーひろば」）が開設された。子育てカレッジの運営は，大学・行政・民間よりそれぞれ委員が任命され，実行委員会形式で行われている。

「おかやま子育てカレッジ」の認定には，以下の７つの取組み内容が定められている。「①大学の学生が参加して実施する親子交流など，②地域の子育て支援サービスの提供者に対する質的向上の取組み，③子育てや子育て支援に関する相談の実施，④子育てや子育て支援に関する情報発信，⑤子育て支援に関するボランティア・NPO等の活動への支援，⑥地域の子育て支援関係者の情報交換，⑦その他の調査事業」である。以上の中で特に大学では，学生が参加して行う親子交流に力を入れており，保育専門科目の授業の一部を活用して親子交流を行う授業形式（「協働授業」と称している）を模索してきた。

Ⅱ．「協働授業」の見直しと新規科目

現在，事業開始より10年以上が経過し，「協働授業」の方法論もある程度確立し，学生の実践力向上に資することができたと考えられるが，幾つかの課題も見えてきた。学生は，「おかやま子育てカレッジ」や「県大そうじゃ子育てカレッジ」の設立経緯や連携の在り方など，事業の全体像を学ぶ機会がないまま交流実践に取り組んでいるた

http://doi.org/10.15009/00002456/

め，地域子育て支援の価値・意義を十分に理解できていないのではないか。また,「協働授業」は，主に学内のみで展開されるため，学外に出て地域コミュニティと積極的に関わったり，学外の子育て支援に触れたりして，より見聞を広める体験もこれからの保育者養成には必要ではないか。

以上の課題を背景に，筆者らは，2021 年度の本学子ども学科新設に併せて開講できるように，新しい子育て支援に関する科目を検討することとなった。

本研究では，この新しい科目「子育て支援プロジェクト研究 A」の概要と 2021 年度の試行状況について報告し，保育者養成課程における子育て支援を学ぶ授業モデルの一つとして検討したいと考える。なお，倫理的配慮として，本研究の関係者には，事前に研究の趣旨を丁寧に説明し，資料の使用や研究報告の許可を得ている。

Ⅲ．授業の概要

「子育て支援プロジェクト研究 A」は，「おかやま子育てカレッジ」の意義を理解し，入学時から学内にある子育てひろばと親密に関わることができるように，子ども学科１年生の科目として考案した。科目の特徴としては，以下の４点が挙げられる。また，**資料１**にシラバスの一部を抜粋した。

1．専門家の講話から事業の全体像を知る

この授業では,県の担当者を招聘して「おかやま子育てカレッジ」の取組みの経緯や連携の在り方などについて，直接話を聞くこととした（**資料２**）。また，学内子育てひろばの子育て支援スタッフにも話を聞き，利用親子の実態や地域の子育て支援の現状などについても理解を深めることとした。

２．親子プログラムの企画・実施

学内子育てひろばである「チュッピーひろば」に集う親子のために，親子で楽しめるプログラムを企画･実施することとした。１年生で未だあまり交流の経験がないため,スタッフが以前から開催していた「夏祭り」に幾つかの遊びのコーナーを開設する形で参画することとした。

３．学外の地域コミュニティと交流

地域のコミュニティ・スペース「きよね夢てらす」(総合型地域スポーツクラブの拠点でもある）や施設内にある子育てひろばを見学し，地域での交流の在り方や住民との協働について学ぶことも試みた。クラブマネージャーから直接施設の説明や役割などの話を聞き，学内の子育てひろば以外の地域のコミュニティにも目を向ける機会とした。

４．学びの振り返りと共有の重視

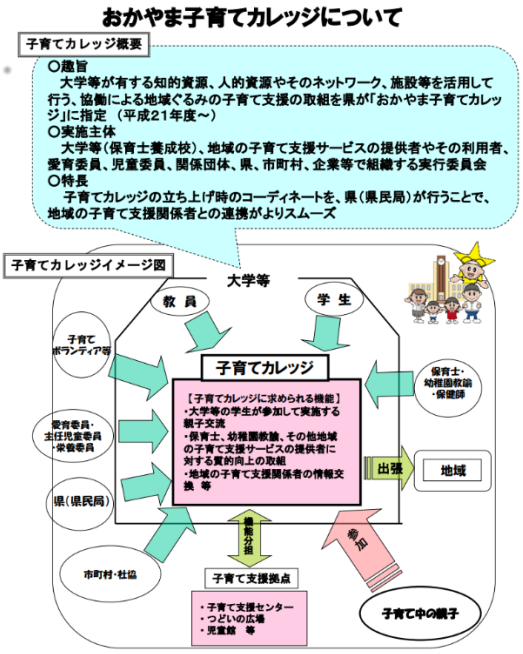
授業の最後には，グループごとにスライドを作成して，特に夏祭りの実践に関して 10 分程度の発表を行うこととし，質疑応答の時間も設けた。自らの課題にも気付くことができ，今後の協働授業の実践に繋がるよう学びの振り返りと共有に力を入れた。

資料1.「子育て支援プロジェクト研究 A」シラバスの抜粋

◆授業のねらい
・地域の子育て支援の現状や「おかやま子育てカレッジ」の役割について理解し，連携の在り方等について説明することができる。
・地域の子育て支援の行事への学生参画の方法を検討し，仲間と協力して実践や交流を行うことができる。
・協働的な実践やその報告を通して，成果の共有を行い新たな課題を見出すことができる。

◆授業の構成（全８コマ・通年集中）
① オリエンテーションと学内広場の見学
② 地域の子育て支援の現状，及び「おかやま子育てカレッジ」の役割（専門家の講話）
③ 地域の子育て支援の現場の実際（学外・見学）
④ 子育て支援拠点行事への学生参画の方法
⑤ 親子プログラムの計画と準備
⑥ 実践及び交流
⑦ 実践の振り返りと評価
⑧ 成果の共有と課題の確認（成果報告会）

資料２.「おかやま子育てカレッジ」イメージ図[3]



Ⅳ．学生企画による親子プログラムの実施

1．親子プログラムの企画

「子育て支援プロジェクト研究 A」では，様々な体験的活動を試みたが，紙面の都合により，授業内容のうち学生が最も主体的に活動することができた「チュッピーひろば」の夏祭り参画について報告する。夏祭りは，2021 年９月に予定していたが，コロナ禍により一旦中止になり，その後 10 月５日に開催することができた。学生は，１年生なので学内子育てひろばを利用する親子と触れ合うことも初めてであった。そのため，親子プログラム企画に先がけて，夏祭りに向けての要望を保護者にたずねる聞き取り調査を予習課題として課した。授業の空き時間などに学内子育てひろばを訪れて，利用者である母親らに，夏祭りでどのような遊びを子どもと一緒に体験をしたいかなどをグループごとに聞き取りを行わせた。

２．親子プログラムの実際

学生は，聞き取りの結果を参考にしながら，グループで打合せをして，「シャボン玉」「水鉄砲」「手形アート」「玉入れ」「魚釣り」などのコーナー遊びを計画した。準備段階に，スタッフからも助言や指導を受け，遊びの内容を子どもの発達に合うものに修正した。当日は，親子 20 組の参加を得て，殆どの参加者に全てのコーナーを回っていただくことができ，非常に好評をいただいた。特に，夏祭りに相応しく，水を使った遊びを工夫して行うことができており，例えば「水鉄砲」では，消防士になって火を消すイメージで「なりきり消防隊」と遊びの名称を付けて，楽しく遊びを展開していた。

写真１．「シャボン玉」の実践の場面

写真２．「水鉄砲」の実践の場面

写真３．「手形アート」の実践の場面

写真４．「玉入れ」の実践の場面

写真５．「魚釣り」の実践の場面

大学の中庭の木々など，自然環境を活かして吊るした火の的に向かって水をかけるという遊びは家では出来ないダイナミックな遊び方であった。学生は，親子に楽しんでもらえるように，遊びの準備とともに，援助や適切な声掛けなども率先して行うことができていた。一部，準備物の数が不足して親子を待たせたり，子どもが思いがけない用具の使い方をしたりしていて，戸惑った部分もあったが，それらも実践から得られる貴重な学びとして受け止められていた。実践の様子の一部を**写真１～５**に示した。

Ⅴ．学生の学びの様相

受講生 26 名には, 事後にこの授業を終えての実践上の自身の学びや課題，及び地域における子育て支援についてどのような考えをもつことができたかを記述させた。記述の分析には, 代表的な記述の質的分析と, オンライン上での使用が許諾されているユーザーローカルテキストマイニングツール（ https:// textmining.userlocal.jp/ ）を用いて量的な観点でも分析を試みた。以下，受講生の事後の学びの様相を見てみよう。

1. 実践上の学びや課題

受講生は，低年齢児やその保護者とかかわることが初めてであったので，思いがけない行動に対する対応において特に未熟さを実感したという以下のような記述が多く見られた。「子どもの発達と遊びの関係について知識不足を大きく感じた」「私の課題は子どもが予想外の行動をしても，受け入れることができるようになることだと考える」「自分の課題として，予想される子どもの反応や遊び方をふまえて遊びを用意し，柔

軟に対応することができるようになる必要がある」などである。

また，具体的なやりとりの場面から「複数人の子どもが同時に話しかけてきた場合の対応が不十分だった」「子どもたちへの声掛けのレパートリーが少なかった」などの反省も見られ，今後の学習に繋がる課題が真摯に捉えられていることが確認された。

図１は，受講生の実践上の学びや課題に関する記述をワードクラウドで示したものである。記述には「子どもたち」「子ども」「学ぶ」などの語が多用されており，量的な観点においても実践を確かな学びとして捉えている学生の姿が浮かび上がる。

２．地域の子育て支援への関心の深まり

殆どの学生が地域の子育て支援は重要であると認識しており，その中で子育て支援の役割を学生なりの視点で捉えている記述も幾つか見受けられ，学びや関心の深まりを確認することができた。「子育て支援は子どもの成長を支援するだけでなく，親の成長も支援していることを知った」「地域に子育て支援の場を設け，親子が集い交流をすることで，子どもだけでなく親にも話し相手ができ，子育ての悩みを減らせるなどの良い影響を与えることができると分かった」「コロナの影響であまり外に出ることもできず窮屈な環境で毎日を過ごしている親子にとって，同年代の母親が集まって話をしたり，他の大人がいて子どもを見てくれる環境があることは日頃のストレスを解消するために重要なことだと思った」などである。また，より深い考察として，子どもや親を取り巻く社会環境への言及も見られた。「近年，核家族化や女性の社会進出による共働き世帯の増加などから，子育てに対して孤独や不安，ストレスを感じる保護者の方が増えている中で，このような子育て支援の仕組みがあることは，そのような保護者の方にとっての大きな安心に繋がることを改めて実感した」などである。この記述では，子どもは勿論のこと，子どもを取り巻く環境にも思いが寄せられている。本科目の実践的学びにより，地域子育て支援に対する理解を広げる第１歩を導くことができたのではないかと考えられる。

図２は，「地域における子育て支援についてどのような考えをもつことができたか」について受講生の記述をワードクラウドで示したものである。記述には「子育て支援」「地域」「子どもたち」「チュッピー（ひろば）」「保護者」の語が多用されており，量的な観点においても地域子育て支援への関心の深まりが示された。

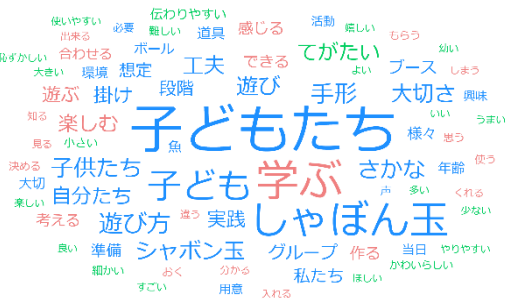


図１．ワードクラウド（実践上の学びや課題）

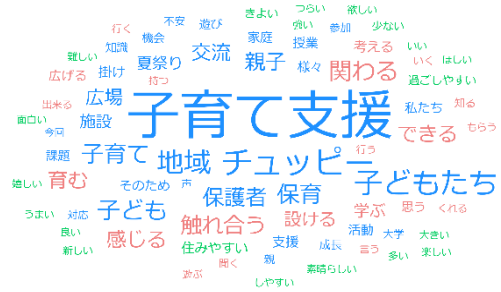


図２．ワードクラウド（子育て支援についての考え）

3. 学びの総括

夏祭りにおける親子プログラム実施後には，グループごとに実施の状況や反省点をまとめ，スライドを制作して発表した。その後，授業成果報告として**資料３**のポスターを制作した。このポスターは，学内子育てひろばに展示して利用者へ学びの還元を図るとともに，2022 年度オープンキャンパスにおいても展示し，高校生に保育や子育て支援に関心をもたせる一材とした。

資料３．授業成果報告ポスター

Ⅵ. 課題

学生の事後の記述を見ると，筆者らの授業のねらいは概ね達成することができたと考えられる。特に，事業の沿革や子育てひろばの設立経緯，連携の在り方などを理解してから実践に臨んだことが，子育て支援への意識を高め学びを深めることができたのではないかと推察する。

しかし，本科目は，2021 年度はコロナ禍の影響もあり，授業の内容の入れ替えや延期などがあり計画通りに進めることができなかった部分もある。全８コマであるため，「研究」という所まで深められなかった点も見直しが必要であろう。

今後は，さらに検証して，授業モデルとして一般化できるように精査していきたいと考える。

謝辞

「子育て支援プロジェクト研究 A」にご協力いただきました県大そうじゃ子育てカレッジ実行委員会の皆様，また地域の皆様に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は，2022 年５月に開催された日本保育学会第 75 回大会において研究発表した内容を加筆修正したものである。

註

(1) 岡山県ホームページ：「おかやま子育てカレッジ」https://www.pref.okayama.jp/page/273496.html（閲覧日：2021/12/24）.

(2) 親子の交流機能を持つ子育て支援の場については，「子育てひろば」と表記されることが一般的であるため，以降は本研究においても「子育てひろば」と表記する。大学内においては「学内子育てひろば」，また呼称である「チュッピーひろば」と表記する場合もある。

(3) 岡山県ホームページ：「おかやま子育てカレッジイメージ図」https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/273496_1029875_misc.pdf (pref.okayama.jp)（閲覧日：2022/09/12）.

Trial of a Classroom Model for the Practical Learning of Childcare Support in Nursery Teacher Training

Junko NIIYAMA, Yukiko KYOBAYASHI
Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University

Abstract： In 2010, Okayama Prefectural University established an on-campus child-rearing support center in response to the "Okayama Childcare College" Project promoted by the prefecture. In the training curriculum for nursery teacher, lessons have been designed so that the students can learn practically through exchanges with parents and children gathered at this center. In this study, we examine and report on the outline of the newly established "Child Rasing Support Project A," course for more in-depth and practical study of child-rearing support, and the status of its trial in FY2021. The students' opinions after the program revealed that they saw several points that touched upon the value and significance of child-rearing support, and it was thought that understanding the background of the establishment of the center before the course was implemented led to deeper learning.

Keywords： Nursery Teacher Training, Childcare Support, Classroom Model, Okayama Childcare College